

広島大学学術情報リポジトリ

Hiroshima University Institutional Repository

Title	子どもの感情生活における浄化作用について：「夕日」作文にみる子どものイメージ運動
Auther(s)	小林, 照子
Citation	児童の言語生態研究 , 13 : 48 - 62
Issue Date	1988-03-15
DOI	
Self DOI	
URL	http://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00045145
Right	
Relation	



特集

子どもの泣き

子どもの感情生活における 浄化作用について

——「夕日」作文にみる子どものイメージ運動——

小林 照子

はじめに

我々は子どもが泣くことの生を探るべく研究を進めてきた。「顔をくしゃくしゃにする」「肩をふるわせる」「声を上げる」「涙を流す」など、子どもが泣く姿は日常生活の中でしばしば出会うことのできる現象である。しかし我々の研究目的は、子どもが泣くことの現象を類型的に整理することではなく、こういった現象を生じることになった動機を発見することであった。子どもが泣くという現象の奥には、何らかの動機によって誘引された精神活動、すなわちイメージ運動があるはずである。よって、子どもが泣くことの生を探るということは、泣くという現象を誘引するイメージ運動を探るということになる。

研究の目的がはっきりすればするほど、その方法に出会うまでに時間がかかった。今泣いている子どもを

つかまえて、「どうして泣いているの?」と尋ねても、答は得られないということだけがはっきりしていた。だから、「なぜ泣くのか」「どうして泣いたのか」「泣くってどういうことなのか」などの質問によって、泣くという現象を説明させるような方法は選ばなかったのである。

直接法より間接法はどうか。子どもの活発なイメージ運動の中に、泣くという現象を誘引するイメージ運動を見い出すことはできないものだろうか。そのために、子どもの意識を直接泣くことに向けさせるようなことはやめ、現実的なこだわりを解いて、先験的なイメージ運動を起こさせることを考えることにした。

間接的に泣くという現象を引き起こすのではないかといった期待のもとに今回我々が試みたのは、「夕日」という題で作文させることである。説明なしで、子どもに「原風景」との対面をさせるために、「夕日」とい

う題を選んでみることにした。「夕日」という刺激によって誘引されるイメージ運動には、精神の浄化作用といった働き、そして泣くという現象を誘引するような働きがあるのではないか。そんな期待を持ちつつ調査を行なった。

「夕日」作文にみる 子どものイメージ運動

子どものイメージに関する研究については、昭和五十七年から取り組み、今までに様々な実験及び調査を行ってきた。その研究成果は『子ども文化の原像』岩田慶治編著、一九八五年、日本放送出版協会、一一五ページ二〇五ページに発表したとおりである。

これまで我々が研究対象としてきた子どものイメージ運動とは、子どもの心の深層にある科学的な知識以

前の世界意識、すなわち、経験や知識の有無にかかわらず、子ども自体を誘引しているイメージ運動であった。その研究の中で我々は「子どものイメージの情動における四つの仮説」として、「予見性」「邂逅性」「祈禱性」「没我性」を立てることができた。そして「穴と留守番」「闇とつば」「手形占いとおまじない」など、子どもが知識以前においてイメージ運動を引き起こすような心意現象をとり上げ、四つの仮説を実証するべく研究を進めてきた。

今回は、新たな試みとして、泣くという現象と関わっているのではないかとという期待のもとに、「夕日」という題の作文を書かせたわけである。調査対象は表1の通りである。学年によって数のばらつきはあるが、二年生から六年生までの各学年ごとに約一〇〇づつの資料を得ることができた。

今回の調査で作文を書かせる際に気をつけたことは、調査者が余計な説明をしないことであった。「夕日」という題で作文を書いてもらいます。「夕日」と聞いて、今心の中に広がった思いをそのまま書いてください。」と指示しただけで、作文の内容や長さについては触れないようにした。すぐに書き始める子、しばらく目を閉じてから書き始める子など様々であったが、最後まで何も書けないという子は二年生にひとりいただけだった。また、二年生、三年生では四〇〇字詰め原稿用紙一枚でおさまる子も多かったが、中には二枚以上書く子もあった。四年生以上になると、一枚でおさまる子は少なく、四枚近く書く子も見られた。

二年生から六年生まで、六六七名の作文を読む作業はとても楽しいものだった。「例1：夕日とは日が暮れる合図である。(六年男)」といった書き出しで始まる作文のように、説明的なものは少なく、「例2：夕日を

表 1

● 調査対象		● 調査期間	
昭和六一年五月～昭和六二年五月			
二年生	東京	聖徳学園小	二七名
	群馬	町田成瀬台小	三四名
		中川小	四六名
(計 一〇七名)			
三年生	東京	聖徳学園小	二八名
		市ヶ谷小	三一名
	横浜	八王子第六小	四四名
		大島小	三二名
(計 一三五名)			
四年生	東京	聖徳学園小	三一名
	茨城	八王子第六小	八九名
	横浜	六郷小	四五名
		川上小	三四名
(計 一九九名)			
五年生	東京	聖徳学園小	三七名
		両国小	三三名
	横浜	玉川学園小	二〇名
		並木第三小	三八名
(計 一二八名)			
六年生	東京	聖徳学園小	四二名
		玉川学園小	二五名
		済美小	三一名
(計 九八名)			

見ると自分の一生と過去が見えて来るように感じます。(六年男)」「例3：そして夕日と友達になって日本色んな遊びを教えてあげて、ばくも夕日に色々な遊

びを教えてもらって一緒に遊びたいと思う。そしていつも一緒に暮して死ぬときも一緒に天国か地獄に行つたとしても一緒に遊び一緒に暮したい。(四年男)」といったように、その子の心の世界を再発見させられるようなものが多かった。

「夕日」は我々が予想していた以上に、子どものイメージ運動を引き起こしてくれたのである。ほとんどの作文に子どものイメージ運動が見事に書かれていたのので、改めて、そうではない作文を拾い出してみた。イメージ運動が書かれていない作文、すなわち自分の心の世界に触れていないものは、六六七例中の六九例、全体の一〇％にすぎなかった。

「夕日」作文に書かれた子どものイメージ運動は「予見性」「邂逅性」「祈禱性」「没我性」という四つの仮説を、どこまで実証できるのか。また、泣くという現象を誘引する働きがあるのか。「夕日」作文を分析しながら考察を進めて行きたい

＜イメージの邂逅性＞

1、夕日はエネルギーの源

「例4：夕日を見ると、よし勉強がんばるぞ、というふうになるのです。(三年女)」

このように「夕日を見ると元気が出る」といった例は、二年生から六年生すべての学年に見られた。子どもが、沈んで行く夕日を見ることによって、自分の中にわき上がるエネルギーを感じとっていたとは、我々にとって全く予想外の反応だった。なぜ夕日を見ると元気が出るのかについては、

「例5：夕日を見ると、不思議にあしたもガンバロウという力がわいてきます。(五年女)」

のとおり、子どもも「不思議」としか答えてくれない。しかし

「例6・私は夕日を見ると、もう一日が終って行くような気がします。あすの一日もがんばろうという気がします。」(2年女)

「例7・くじけたり、元気がないと、赤くて大きい夕日を見ると、元気が出てきて、明日もがんばろうという気持ちになります。」(6年男)

「例8・夕日を見ると、明日もがんばろうと思います。」(6年女)

の例のように、「明日」が入っているものが多いことから、一日の終わりを上げる夕日を目前にしている時ですら、子どもには、明日の夜明けを期待すること、次に始まる一日への生命力を感じることができるとも考えられる。もともと、一日の終わりを上げる夕日などと思っているのは大人のちっぽけな思い込みで「例9・夕日が出ている時、遊んだことがあります。どういふわけかとてもいい気分です。ふしぎです。自分の心もみんなの心はずんでくるようです。」(3年女)

といった例のように、子どもの方がはるかに夕日を楽しんでる。夕日を場面ごと受けとめ、からだ全体で感じることに楽しさを知っていると言うことができる。さらに、

「例10・夕日はあたたかい言葉だと思えます。人生が明るくなる気がします。」(4年女)

のように、子どもは明日が明日で終わらず、未来に続いていることさえ感じているのである。

2、夕日はなつかしい

「例11・ゆう日を見ると、わたしはかえるじかんの

でかえます。わたしが『ただいま』とゆうと、おかあさんが『おかえり』といいます。それをきくたび、わたしはうれしいです。あそびにまたいきたいと思えます。」(2年女)

このように、家族や友達との心の交流を書いた例ほどの学年にも見られた。この例の子どもにとって「帰る」ということは、お母さんの暖かさに包まれることなのであろう。お母さんの暖かさに包まれることによって、明日へのエネルギーがわき上がるのだということが十分に感じられる。

表現の仕方に違いはあっても「帰る」ということに触れている例は全学年に見られた。

「例12・夕日を見ると、わたしはともだちのうちのあそんだものをかたづけて、そろそろかえる時間になって、すこしそとであそんでから、みんなにさようならをしてかえます。」(2年女)

「例13・わたしはゆうひをみると、小さいときのことを思いだします。そして、うちにかえってしゃしんをみながら、小さいときのことを思い出します。じてん車にのってころんでないとか、てつぼうからおっこつて、そういうことをおもいだします。」(2年女)

どちらも2年生女子に見られたものだが、例12のような例は2年生に多く見られた。また、例13のように「思い出」に帰ることを書いた例はどの学年にも見られたが、とくに、5年生・6年生では数が多かった。

「例14・竹谷さんは3年生の春休みにひっこしてしまつたので、今でも夕日を見ると竹谷さんの姿が見えてくるような気がします。」(4年女)

「例15・夕日を見ると私は死んでしまったインコの顔を思い出します。」(5年女)

「例16・夕日を見ると、田舎のおばあさんやおじいさ

ん、いとこたちのことを思い出す。そして、そばにおじいさんとおばあさんが立っているようだ。夕やけはぼくのおじいさんみだ。」(3年男)

「例17・夕日を見ていると心がしずまります。昔のことを思い出したり、やなことやよかったこと、わかれというようなことが思い出します。」(6年男)

例14と例15は、夕日とかかわりのある思い出なので「思い出の夕日」と言いかえることもできるが、例16と例17は、夕日によって引き起こされた思い出であつて、思い出の内容は夕日とかかわりのないものである。思い出の内容は様々だが、どの例からも、子どもたちが「思い出」に帰ることを楽しんでいるのがわかる。次に掲げる例18は、そんな人間の楽しみを見抜いているとしか言いようがない。

「例18・そして人は、この夕日の中で、こんな思い出があつたのだと思ひ出すのだと外をながめていて楽しくなりました。」(5年女)

さらに、「思い出」に帰ることがなぜそんなに楽しいのかということについては、例19が答えてくれている。「例19・夕日はすばらしいと思ひました。カラスもいつも夕日を真一文字に通つて行くし、夕日を見上げていくと、思い出がいっぱい広がってくるのです。その日一日の出来事も……。これからは夕日の時を大切にしていくと共に夕日を見ながら心をきれいにしていきたいと思ひます。」(5年女)

子どもにとって夕日がエネルギーの源になっていた理由が、ここで明らかになってきた。ある子どもは母のふところに帰ることで、またある子どもは田舎の祖父母との思い出に帰ることで、そしてある子どもはインコの死という思い出に帰ることで、心は静まり、きれいになる。そうしているうちに、不思議と明日もが

んばろうというエネルギーがわいてくるということなのだろう。これこそ、イメージの邂逅性、「なつかしさにひたる」「思い出にふける」「母のふところに帰る」など、過去にもどることによって、未来に進むエネルギーを起すといったイメージ運動こそ、我々が、イメージの邂逅性と名づけたものに他ならない。

3、夕日は涙を誘う

これまで掲げてきたように、「夕日」作文には「イメージの邂逅性」を実証する例が数多く見られた。「イメージの邂逅性」については、

「子どもの語る誘発性は、あたかもロープウェイの網の如くに、前進は引き戻しとともにあることを指摘したい。そのため、これを邂逅性と仮称しておきたい。」

（『子ども文化の原像』177ページ）

と述べた通りであるが、この仮説は、「夕日」によって引き起こされたイメージ運動にも、びったりあてはまるものであった。

前進のエネルギーについてはすでに述べたが、「思い出」に帰ることによって、前進のエネルギーをわき上げらせる過程に、もう一つ注目すべき働きがあることが明らかにになった。

「例21・夕日を見ていると、つかれがとれて心がやわらぎます。一日のことが思い出されて、とてもおだやかな気持ちになります。（6年女）」

「例22・夕日は今日一日、いや、もっと前のことも思い出す。夕日を見ているといろんなことを思い出し、心もほっとする。夕日をいつまでも見たくなる。（5年女）」

これらは、夕日を見ることによって、心静かになるという例である。この他にも

「例23・よくねむれない時は、夕やけを思い出します。そうするとよくねむれます。（3年男）」

「例24・夕日を見ていると心がしずかになり、ぼーっとしてしまう。なぜかという気持ちがいいからです。見ていればしずかなきもちになってきます。（3年女）」

「例25・夕日はオレンジ色できれいだからです。（中略）オレンジ色は心がなごむような色です。（4年女）」

「例26・それにいつも、いらいらしていたり、おもしろいことがないときは、よく夕日を見る。雨の日以外のことだけど。そうすると気持ちになんとなくおちついて、いかりがきえ去る。（4年男）」

というように、夕日を見ることによって、心が静かになるということを書いた例は、二年生を除くすべての学年に見られた。

また、夕日によって引き起こされるイメージ運動には、心が静かになるだけではなく、つかれや悪をふっとばす、浄化作用があるのだということを書いた例も見られた。

「例27・ゆう日を見ると、ぼくは心がいいきもちになる。（2年男）」

「例28・夕日を見ていると、つかれがとれてしまうほど、きれいです。（3年男）」

「例29・それに悪いことがあると、そんなことはふつとんでしまいかんじ。夕日を見ていると心がきれいになってきます。なぜかそんなかんじがしてしょうがない。（4年女）」

「例30・夕日にはゆめがある。明日がある。夕日を見ているといやな事はわすれる。うれしい事を作ってくれる夕日は、人をなぐさめるために出てくるのかも

れない。（5年女）」

「例31・きれいだなぁと思う夕日。夕日を見ていると気がやさしくなったような気がする。他の人も悪い心がぬけていき、善い心がもてると思う。（6年男）」

我々が「夕日」という題を選んだ時には、子どもがこれ程までに自分の心の働きを書いてくれるとは思ってもみなかった。事実、数の上では、ここに掲げた例より、自分の心の働きは書かずに、夕日の美しさを讚美しているものの方が多い。夕日について「きれい」「美しい」「まぶしい」「明るい」「大きい」「すばらしい」と書いた例は、どの学年でも数多く見られた。しかし、心の働きが書かれていないからといって、これらの例を軽ろんじてはいけない。子どもが夕日を見て「美しい」と思うのは、子どもの心と夕日とが共鳴しあっているからなのであって、その共鳴と、「心が静まる」「心がきれいになる」といった精神の浄化作用とは、同時に起きているのだということも忘れてはならない。例32はその答えだといえよう。

「例32・夕日は、人間のきもちをなごやかにしてくれたり、そんなことでくじけるなとゆうことを、自然がぼくたちに、きれい、美しいといかんじようをもたしてくれているのではないかとぼくは思う。（6年男）」

夕日によって引き起こされる感情について、子どもたちは「悲しい」「さびしい」という言葉を多く用いていた。

「例33・わたしは「夕日」というだけで悲しくなります。なぜかという、夕日がしずんでしまうからです。夕日がしずんだかわいそうなきがするからです。わたしはどうしても悲しくなつてきます。かわいそうなきがしてくると、ちっちゃいときのことを思い出

ます。でもいいことがあるかもしれない。(4年女)」「支離滅裂とも言えるこの例には、「悲しみ」と「同情」と「涙」と「思い出」と「未来」とが一度に書かれている。四年生の子どもには、自分の心の中でこの五つの要因がどのようにかわりあっているかという説明がうまくできなかったのであろう。かといって、この五つを切り離すこともできなかった。

一般的には、「悲しいから泣く」とか「かわいそうだから泣く」などと言って、泣くことを説明しようとするが、実際は、それ程単純ではないのだということを、この例が教えてくれているのではないだろうか。

「例34・わたしは、夕やけの中でみんなとあるけたらいいだろうな。一度だけでもだちぜんいんで手をつないでいっしょに歌をうたいたいな。そうしたらとってもうれしくて、からすといっしょにうたをうたってみたいな。そしていっしょにかえりたいです。とてもうれしくて、目の中からなみだがでそうなかんじになってくるかもしれない。(3年女)」

「例35・富士山の所に夕日がかさなっている。絵にでも書いてみたいな。その絵にはいっぱいなみだがたまっていくようだ。(5年女)」

これらのように、夕日によってわきあがる感情に、涙を書いた例も見られた。

今までに35の例を掲げてきたが、これらの例は、我々に、子どもが帰ることによって精神を浄化させ、さらに未来に進むエネルギーを感じとっていることを教えてくれた。

先に、「前進のエネルギーをわき上げらせる過程に、もう一つ注目すべき働きがあると」と言ったのは、この精神の浄化作用のことである。子どものイメージ運動に、精神を浄化する働きがあるということ、そして、

それは、涙を伴っているということは、我々が今回の調査で得た、新たな発見である。

＜イメージの予見性＞

1、夕日と予感

「例36・この前、夕日のゆめを見た。それはまるでげんじつのように生々としたゆめで本当にその場にいるような気がして、それでいてゆめとわかつているへんなゆめだった。気もちがわるいので、早く目がさめるようにがんばったけどおきれなかった。数分後……やっとおきた。家の人にそのことを言ったら、「ハハハハハハそうかい。」と言っているが、僕はなにかの前ぶれだと思う。でも夕日だけでないかの前ぶれとは言えないもの。(3年男)」

誰れにも奇妙な夢の経験はある。何かにとりつかれたような気がして、なんとかふりはらおうとするのだが、そんな風にもがけばもがくほど夢の記憶が鮮明に浮び上がってしまうといった経験。忘れようとしても忘れられない、そんな夢の経験がある人も少なくないだろう。例36もその一つだと言えよう。夕日になにかの前ぶれを感じたというのだが、家の人には笑われてしまうし、最後には、自分でも自分の感覚を疑ったりしている。自分以外の人に話しても信じてもらえそうもないのに、なぜか自分にはそう思えて仕方がないといった予感、虫の知らせを感じるの、決して子どもだけではないはずである。我々は、このように「もしかして」という気分とともにあるイメージ運動を、イメージの予見性と名付けることにした。そして図らずも、「夕日」作文には、例36のようにイメージの予見性を実証するようなものが見られた。例36では夢の内容

については書かれていないが、自分でもつかみどころのないエネルギー、何かが起こりそうなエネルギーを感じとっていることはよくわかる。

2、夕日と戦争

「例37・夕日というと思い出してくるのはとてもきれいな赤い清らかな空である。その赤い空をしばらく見ていると、ぼんやりと頭の中に音のあるものがうかんでくるのである。それはげんばくである。広島人民・長崎人民をあんなにまで、むざんに焼きはらい日本人をきょうふのどんぞにおとし入れた話である。けれども、なぜ夕日とげんばくが共通するんだろう。まず、考えられるのが赤いということだ。もつとふかく考えて見ると、夕日は清らかでとてもうつくしい。げんばくはきょうふと音がなりひびくおそろしいものである。げんばくから四十年たった今、げんばくのおそろしさは、だんだんきえていくが、そのおそろしさは口ではいえないものである。ただ、領地をひろげるために戦争で何十万人という人々を殺していったのである。今、考えても考えつかない事である。今、戦争をしているイラン・イラクなどは、領地をもっているだけではないのかと僕は思う。世界の人々は、きつともう戦争をやりたいくなく、平和がくる日々を願っているにきまつているのではないかと僕は思う。今や、力では通じなくなり、言葉にかかっている。もし、中曾根首相が、オーストラリアにへんな口ごたえをする、オーストラリアからはたくさんの輸入品があるのにもういやだといわれ、日本はもうそこでだめになっってしまうにちがいない。今は戦争がそうかたさんにおこらなくなったので、昔よりは良くなったに違いない。けれども本当のしあわせはまだまだとうていむりであ

る。日本人が中国の北部に満州国をつくった時、中国人はどういうふう日本人を見ていたのだろうか。むりやり日本語をしゃべらされて、しゃべらないとおしおきがくるのである。そんな時の夕日どうだっただろう。夕日は、いやな心とかをしずめ快いものにしてくれるものである。今、なんときれいだなと思っている夕日は、今しかみれないのである。いつ死んでしまうかもしれないのである。だから、その日の一時間、一時間を大切につかっていく必要があるのである。清らかな夕日は一ばんいいと僕は思う。(5年男)

例37は書き始めから終りまでの全文を掲げた。「夕日」という題で、このような作文が生まれようとは、驚きである。この例を単なる戦争批判あるいは過去において人間が犯した罪の批判として片づけることはできない。夕日の清らかさと原爆の恐しさを対比させている部分があるが、我々が考えなければならぬのは、なぜ五年生の子どもがこのような対比を書きつけたのかということである。けれども本当のしあわせはまだまだとうていむりである。」というのは、悲観というより予感だと考えたい。すなわち、人間が生活をいつたものゝがれることができない戦いの予感といったものを、人一倍強く感じるからこそ、ここまで書くことができたのだと考えたい。そして注目すべきは最後の部分である。

「そんな時の夕日はどうだっただろう。夕日はいやな心とかをしずめ快いものにしてくれるものである。」ここで、夕日と原爆との対比の意味が明らかにになる。対比というより共存と言った方がよいのかもしれない。人間は生きていく上で様々な戦いに出会うに違いない。しかし、どんなに恐しい戦いをして、再び清らかな心を取りもどすことができるのだということ。

平和への可能性は精神の浄化作用にかかっているのだということを書いて訴えているのではないだろうか。今回の調査で五年生の子どもから、人類への提言とも言えるような発言が得られたことは全く驚きとしか言いようがない。

「例38・ぼくは、もしもビックリマンがいきていたら天しとあくまをたたかいをさせます。そして夕がたになつて、夕日のなかでたたかいをさせます。天しのぶきは、けんやらたてです。あくまのぶきは、かまやらたてです。夕日がしずむころ、たたかいはおわつて天しのかちになりました。(3年男)」

これは三年生なりに夕日と戦争の共存に気づいている例といえよう。

戦いは日常生活でもしばしば起こる。次に掲げる例39は日常生活における戦争、けんかをとりあげ、そこでも平和への可能性が精神の浄化作用にかかっているのだということを書いて訴えたものである。

「例39・ぼくは去年まだ部屋をかえていなかった時に、母と兄が大げんかをやつたのを見ました。その時は、けんかをやっている部屋には、全然入れなかった。なぜかという、物をなげたりしているの、入ればすぐにけがをしそうだったからです。ぼくは、自分の部屋にもどると、まどをあけて、外を見ました。ちょうど夕方、しずかで、夕日で赤くなっていました。ぼくは、母と兄も、このけしきのように、しずかで平和になればいいと思いました。いまでもこのことは、いんしょうにのこっています。(4年男)」

そして、この例39の母と兄に送るメッセージとして、うつつけの例も見られた。

「例40・わたしたちは、つらいときは夕日見て、きげんをなおすことです。けんか、くるしみもあります。

それを夕日とかんけいにすれば、きっとそうゆうものをなくしますね。でも、きげんがなおせないのなら、あくしゅも、なにもできないのなら、あやまって、夕日を見ましようね。夕日はきれいにきえていくんだ。(3年女)」

3、夕日と事件

例36から例40までに、夕日と戦争の共存を確かめてきたが、次に掲げる例41からは、夕日と戦争の共存には涙が伴っていることを、確認することができ。

「例41・私は海へ行って夕日を見たとか、特別夕日に関心がありません。しかし、私はこの夕日に強い思い出が印されている事をハッキリ覚えてます。いつも夕日を見るたびに、つい涙が浮かび出てくる悲しい思い出。その出来事は私が四年の時でした。個人面談で私はとても算数が悪い、という事を先生が母さんに言いました。私が勉強面でおくれるこの理由は沢山有るけれど、その中の大きな一つにコーラスと言う問題がありました。当時私はコーラスに入っていました。私はこのコーラスがとても好きで、高校までやっていたと言うぐらいとても好きでした。ただ帰りがおそく、練習がきびしいので、そのコーラスのある日は一日中ぐつたりとしてしまうぐらいなので、その日は勉強ができないのはあたり前。だからこのコーラスを辞めなさいと言われてしまつても、文句は言えませんでした。けれど本心は辞めたくないに決まっています。でも悪いものは悪いものでしょうが無いのです。むしろしつかりやらなかった私が悪いのだから……。しかたなく退団書を持つてコーラスに行きました。その時の気持ちを書けと言われても、ただ熱いものが胸にこみ上げていくだけで……。その時もらった楽譜が夕日

の歌でした。詩の「夕日が背中をおしてくる。また明日こいと言うて」と言うあの曲です。その曲が静かなさめざめとした悲しい感じの物で、歌っているうちに涙が出て来て……。いすにつつぷして泣き出してしまいました。いやみなぐらいにその曲は静かで……。もうとにかく泣くだけでその最後のコーラスの日が終わってしまいました。帰る時、夕日に映えた校舎がまぶしく美しく光って、また新たな涙をさそい出すのです。転がるように家に帰って見たものの、今の今まで夕日を見ると、コーラスのやさしい先生、友達、思い出があふれ出てたまりません。つまらない思い出と思うかもしれないが、私は夕日にこのような思い出をいだいているのです。(6年女)

最後のコーラスでもらった楽譜が「夕日の歌」だったという。これは単なる偶然なのだろうが、この例を読んでいると、そう簡単には決められない気さえしてくる。これが「夕日の歌」でなかったとしても、この時の思いは変わらなかったであろうし、おそらく同じように涙を流したに違いない。しかし、ここで今まで我々が進めてきた考察の上に立つなら、「夕日の歌」だったからこそ、より心の浄化作用が活性化されたのだというように考えることもできる。

六年生の女の子に四年生の時の思い出を、ここまで鮮明に語らせたものは何か。それは、まだ始まったばかりの人生において、この子が味わった、自分との戦いの実感、どん底につき落とされたようなショックを感じながらも、また元氣になれたという、よみがえりの実感ではないか。この例には、夕日と、自分自身との戦いとが共存している。そして、どん底からよみがえるためには、多くの涙が必要だったということをこの例は教えてくれているのではないだろうか。

人間はその人生の中で様々な事件に出会いそれらを精いっぱい乗り越えて生きているのであろう。

一例42・夕日と聞くと私は、ある前の事件を思い浮かべます。事件といっても本当にちょっとした事件ですが……。

私が四年生の時に、私のおばあちゃんの長男（私はういちにいちちゃんと呼んでいる。）が犬（ボメラニアン）をもらってきました。その犬はういちにいちちゃんの友達動物病院のお医者さんからもらった犬です。でもその犬は、ちゃんという子にしてたもらうということで、まだ、ちゃんと、もらったわけではありませんでした。その犬の名前は「ミミ」でした。私は、とても動物好きだったんだけど、それまで、犬はかっでもらえませんでした。なぜって、おじいちゃんは、大の動物好きで、捨ててあった子猫を拾ってくるだけで、家を出してしまいうぐらいますから。だから、ミミが連れてこられて、私は大かんげいでした。でも、ミミは、あんまり人なつこい犬じゃなかったたので、すぐにはなついてくれませんでした。それでも、一週間もたつと、私が帰ってくると、飛んできてくれるようになりました。ミミは、ういちにいちちゃんも綾子おばちゃん（奥さんのこと）も働いていて、夜にならなると帰ってこないの、その間は、家であずかっているんです。でもミミは、私がもらってもらえる様にいい子にしない言っても、全たいいい子にしないんです。家のじゅうたんやたたみにうんちやおしっこをしちやつたりするんです。そのたびにおばあちゃんたら、

「今日は、ミミたらたたみにおしっこしちやつて、後かたづけに一時間位かかっちゃったわよ!! バカな犬ですこと!」

なんてオーバーに言うもんだから、私は必至に「でもね、そんなにいっぱいしなかったし、あとも残らなかったよ。」

と弁解するんですが、さすがにおばあちゃんの勢いには勝てません。そうゆう事が何回もあって、なんとなくういちにいちちゃんもあきらめた様な感じでした。

ミミをあずかってから一ヶ月たったある日その日も私は、ミミが来るのを、今が、今かと待っていました。でも、その日は、なぜかミミが来ませんでした。夕方になって、おねえちゃん（おばさん）といっしょにういちにいちちゃんの家に行きました。私はもしかしてミミを返してしまったのかと思うと、目に涙がうかんできてしまいました。そうしてういちにいちちゃんの家のドアを勢い良く開けました。いつもの様にミミは飛んて来ませんでした。私は泣きながら

「ミミ、返しちやつたの?」

と聞くとだまっとうなずいていました。その時、私はそこらじゅうにひびきわたる様な声で泣きわめきました。しばらくたって私の泣き声がおさまったころ、おねえちゃんが

「もう、帰ろうね。」

といってくれたので、やっと泣くのをやめて顔を洗いました。そして外に出てみると、夕日がとつともとてもきれいでした。もし、その時が、あんなに悪い事がおこらない日だったら、夕日が大大好きになつていたと思うけど、私にとって、夕日という物は、かなしいというイメージがわいてきます。でも、その日にそんないやな事がなかったら、夕日という物のイメージは、たぶん、やさしいという感じだったと思います。

(6年女)

自分でも「本当にちょっとした事件ですが」とこと

わっているように、事件の内容そのものは、この子の人生を左右する程重大なものではない。この子にとって重大なのは、「そこらじゅうにひびきわたる様な声で泣きわめきました。」という実感、「やっ」と泣くのをやめて顔を洗いました。そして外に出てみると夕日がとつてもとつてもきれいでした。」という実感なのである。二年も前のことだというのに、いつまでも忘れずに残っているのは、その時自分の心の中に起きた混乱をどうやって整えたかという方法や過程ではなく、なにもかも忘れて泣いたという実感だということ、そして、泣くことによって心が浄化された実感だということとは興味深い。例41と例42はどちらも人間が泣くのは精神を浄化させ平静に帰ろうとしているからなのだということが、すなわち泣くということは、精神の浄化作用であると同時に、平和へ向かう複元運動だということの証しであると言える。

例36から例42まで、夕日と戦いとが共存しているものを掲げてきた。これらの例は戦争、けんか、事件、自分自身との戦い、子どもたちは「もしかして」という気分とともにあるイメージ運動が、バラ色一色ではないのだということ、そしてどんな戦いに出会い、どんな底に落ちることがあっても、必ず元の平静にもどることができるのだということをお話してくれた。

「イメージの没我性」

1、夕日が出る

「例43・夕やけを見てとてもきれい。赤いきれいなまっかな夕焼け。トマトが海から上がってくるみたい。」

（三年男）

昇る朝日、沈む夕日という大人の感覚からすると、

夕日が海から上がるといふのだからなんとも奇妙な例である。ところが、子どもたちの作文には意外にもこの例と同様の感じ方をしているものがいくつも見られた。

「例44・夕日はなんで出てきたりひっこんだりするんだ。（二年男）」

「例45・夕日はうみやまにしずむ。むこうがわの国に行くのだから、はんたいになるのです。夕方になると出てきます。きみみたいです。（二年男）」

「例46・夕日は朝やってくる。太陽が夕方に出て来るのです。（三年男）」

「例47・夕日はしずんでもつぎの日の夕がたにはまた出てきます。（四年男）」

これらの例を見ると、子どもの心の世界における太陽が、決して科学だけで処理できないのだということがよくわかる。子どもの考え方が天動説に近く、地動説には遠くかけ離れているということを言いたいのではない。むこうがわの国に行っても、また夕方になると出てくるという感覚を大切に拾いたいのである。こういった例は三年生に最も多く五・六年生になると少なくなるが、それでも「夕日が出る」「夕日が上がる」というとらえ方は残っていて、それらがごく自然に書かれている例もあった。

これらの例を見ると、子どもの心の中にある夕日というのは、単に昼から夜への時間経過を表わす風景ではなく、何かの現れ、何かとの出会いとかかわっているのではないかと思えてくる。その何かとは何かを探ることも興味深い。ここでは、子どもと、子どもが出合っているところの何かとを対称的に考えるのではなく、子どもが我を忘れ、イメージの中にひたきっている状態、すなわち「イメージの没我性」につ

いて考察を進めたい。

2、夕日に見とれる

「例48・でんしゃにのっているうちに、まどがらすをみると、オレンジ色になっていました。さっきまではぜんぜんきいろっぽくもなっていなかったのに、いまは、オレンジいろです。まどがらすをみているうちに、とうきょうえきまでいってしまい、帰るときにはまっくらになってしまいました。（三年男）」

「49・夕日を見ていると目が休まるような感じがする。そして時間がたつのもすっかりわすれてしまいます。（三年女）」

これらは夕日に見とれているうちに、時間の経つのもわすれてしまったという例である。三年生の時間感覚がどのようなものであるかについて、今はっきり言うことはできないが、少なくとも、これらの例からみると、彼らが物理的に経過していく時間とは違う時間を実感していることは確かである。この他にも、夕日に見とれてしまったために起こった笑い話のような例があった。

「例50・きのう夕日を見ました。一日はれていたのでもきれいでした。やきゅうをしていたのでボールが顔面にあたりました。おじさんが『ぼけつとするな!』といいました。バッテリーになると、それをまたみていたので、さんしんしました。そのとき『夕日のバカ』と思いました。おじさんが『どんまい。どんまい。』とはげましてくれました。一回だけホームランをうちました。かえるとき空をみていたのででんちゅうにぶつかりました。もうすこしでなきそうになりました。でもおじさんがみていたのでなきませんでした。」

（三年女）

「例51・ぼくはピアノのかえり道ものすごくきれいな夕日を見た。すこしの間その夕日をずっと見ていたら、電信柱にあたりそうになってハンドルをすぐりかえて「よかったあ」と思ったら、すぐ前にかべがあつたので、それもよけたので、また「よかったあ。」と思った。自分でもあの時はものすごくよかった。今度は直線コースなのでごくスピードを出していたら、また夕日の方を向いてしまった。そしたらいきなりガタンときたので、「あつ」と思わず言ってしまう、下を見たらジャンプ台みたいなボコンとより上がっている所を見つけたので、あそこだなーと思った。(五年男)」

どちらの例も決して読み手の笑いを意識して書いているわけではない。文章からも自分の対験をまじめに語っていることがわかる。夕日の力に引き込まれて、すっかり我を忘れてしまったというのであるが、子どもが日常生活の中で、夕日に魅せられる実感を味わっていたとは意外であつた。

夕日がどんな力を持っているかについて書いた例もあつた。

「例52・お母さんも夕日にうっとりしている。夕ご飯作りのと中で、夕日は手を止めるすごい力をもっている。私は勉強のと中で手を止められ、お母さんは夕ご飯作りのと中で手を止めてしまふ。不思議だな。夕日はいつも見るたびに感動してしまふ。(五年女)」

「例53・わたしは「夕日って大きくてきれいだな。」と思ひながらみとれてしまつて、なにかもわすれてしまひそうな夕日が大好きです。夕日ってなにかふしぎなみ力とやさしきがあるからです。夕方になると夕日にいろいろてらされて、空はまっかにそまつてきれいです。わたしが夕日にすいこまれそう。一ど夕日に

すんでみたいな。それはゆめだけだ。(三年女)」

夕日の不思議な魅力を感じている例は多い。そして「いつまでも見ていたい。」「夕日に住んでみたい」というように夕日に魅せられる実感を求めているものもある。

「例54・ぼくは夕日がしずみそうになると「ああ、あんなにきれいだからいつまでもみたいなあ。」とほんやりしていたら、おかあさんに「早くはいりなさい。」といわれ中に入ります。(四年男)」

これは、ほんやりと夕日の魅力に酔っていたらお母さんの声で現実にもどされたという例である。また、次に掲げるのは、夕日に魅せられている時の実感について書かれた例である。

「例55・夕日を見ると、からだがぼつとあつくなつてしまひます。それでじぶんがこの世界にいないのだとおもつてしまひます。(三年女)」

「例56・夕日を見るとぼくはゆめをみている気分になります。それは、あのまっ赤な空、そしてうす暗いあの感じを思い出します。地面もみんなの家もまっ赤。夕日をみているとあたたかい感じがして、ねむくなりそうになる。ほかの世界にふんわりふんわり飛んでいきそう。(五年男)」

「例57・夕日を見るとぼくはボカーンとつたつたまま、「きれいだなあ、青春というのはすばらしいものだ。」とバカげたことをいひます。あと、自分が自由になつた気持ちになつてしまひます。空を飛びたくなつたり、もうちがう国のハワイにいる感じがして楽しくなつたりします。夕日を見るときほいつもそう思ひます。夕日が上がると、なにかかならず楽しいことやいろいろ思ひだすので、夕日というのは人をなにかの空間にさそいこむと思ひました。(五年男)」

さらに次の例を見ると、その不思議な世界に入ることによつて、心が浄化されるのだということも明らかになる。

「例58・夕日を見るとわたしは不思議な世界に入つていふような気がする。まっ赤な色。ふしぎな色。美しい色。こんな色が私をふしぎな世界に入れてくれる。いやなことがあつても夕日がなぐさめてくれる。(五年女)」

「例59・夕日はとてもきれいで、見ていふとうつとりとして氣をとられてしまひます。ぼくは学校でいやなことがあつても、夕日を見るとそんなことはいつぱんになくなつてしまひます。だからぼくは夕日が大好きだ。(五年男)」

今まで掲げてきた数々の例から、「夕日」という刺激がイメージ運動を起こすのに有効だつたことは言うまでもないが、ここで取り上げた「夕日の力」「不思議な世界」からは、イメージ運動の没我性を確かめることができる。すなわち、子どものイメージ運動には、イメージの誘引によつてその私を没我し、イメージの中の私にひたりきつてしまふという性質があるのだということを、再確認することができた。

3. 夕日にとびこむ

「例59・私は夕日を見ると、自分までまっかなほのおの中に入ふようなかんじがします。夕日は私のようふくの色をオレンジ色にそめてしまひ、かお、かみの毛までオレンジ色にそめてしまひます。そのときは、「やつた。夕日の中に入れた。」とかんじてしまひます。わたしは、夕日の中や星・月の中に入りたといふ小さいころのゆめでした。たいようよりきれいだなあと思ひます。いつか夕日に入りたいなあ。(四年女)」

このように夕日との一体化を実感している例も少なくない。

「例60・夕日が好きです。夕日の中へかけこんでいきたいです。(三年男)」

「例61・あの夕日につつこんでみたい。(五年男)」

「例62・でも夕日は、ゆめのかなたのように本当にきれいな色で光るので、その中へ走っていききたいような気持ちになります。(五年女)」

これらの例は、自分から能動的に夕日へ入りたいというもののだが、次に掲げる例のように、夕日にすいこまれそうだという受動的なものもあった。

「例63・夕日を見ると心がすいとられそうですーとする。(五年女)」

「例64・夕日を見ていると体がゆらゆらしてきてすいこまれそうになります。(五年女)」

この他に、「夕日になりたい」「夕日にのりたい」といった形で夕日との一体化を求めている例が、二年生から五年生の全学年に見られた。なぜか六年生には一つも見られなかった。

「例65・人間がのつたらどうなるんだろうなあ。ぼくものりたいなあ。でもあつそうだからこわい。(二年男)」

「例66・夕日を見たときむねがすつとする。まるで自分が夕日になった気持ちになる。(三年女)」

「例67・一回でいいから夕やけにのつてみたいです。(三年男)」

「例68・わたしも夕日になりたいなあ。(四年女)」

夕日に「のりたいなあ」「なりたいなあ」と希求している時の子どもの心に、どのようなイメージの世界が広がっているのか、それを尋ねてみたい思いがするが、今回の目的は子どもがどのようなイメージを見た

のかではなく、子どもが我を忘れてイメージ運動に没入したときに、より豊かなイメージの世界が広がっているのだということを確かめることにあつた。次に掲げるのは、イメージ運動に身をまかせることの楽しさを歌っているような例である。

「例69・きれいな夕日。夕日を見ていると、自分まで夕日になってしまふ気がする。ほら！ 足の方からオレンジになってきた。わっ！ もうからだがうすーいオレンジだっ！ 足は下の方からだんだんこくなってきている。ういてきた！ いっしょに夕日になっちゃうよ！ そんな気がしてくる。あっ！(四年女)」

「イメージの祈禱性」

1、夕日が見たい

「例70・ぼくは夕日が好きです。ぼくが三才にはじめて夕日を見てびっくりしました。それは大きいからです。そのときから夕日が好きになりました。いつも夕日をまだから見ています。ぼくは夕日が大大大の大好きです。(二年男)」

このように夕日が好きだという思いを書いた例はどの学年にも見られた。この例では、好きだから「いつも夕日を見ている」とあるが、他にも「ずうつと長い間見ている」「いつも夕日が来るのを待っている」「夕日を見にいく」といったものもあった。

「例71・まるで神様のようにやさしくひかっている夕日を毎日かかさずみたいと思います。(五年女)」

「例72・夕日は太陽でできている。だからあんなにきれいなのだ。赤くきれいに光り、まるで星みたいだ。だからぼくはいつも夕日が来るのを待っている。いつもいつも待つてる。(三年男)」

「例73・きょうおとうさんとじろうは花ぞのこうえんに夕日を見にいくのです。じろうはあきからわくわくしていました。(三年男)」

子どもたちがなぜこのように夕日を見ようとしているかについてはここで答えるまでもなく、今まで掲げてきた数々の例がその意味を語っている。ここで注目したいのは、子どもたちが夕日を「すき」だと言い、「見たい」と言い、夕日との出会いを「わくわく」しながら「待っている」という点なのである。我々は先の研究で「唯識論的立場に立たされる働き自体がイメージ活動の中にあるのではないか」という仮説から「イメージの祈禱性」を立てたのだが、ここに掲げた例からも、夕日によって誘引されたイメージ運動の中に、夕日に出会うことへの期待、夕日に出会いたいという目的意識を見出すことができた。

2、夕日にいのる

イメージの祈禱性は仮称であつた。ところが、今回得た夕日作文の中に、この仮称は正しかったのではないかと励まされるような例がいくつも見られたのである。

「例74・わたしは、夕日にもねがいがかうのかなあーとわたしは思いました。もしねがいがかなうとしたら、夕日さんにとびばこのとびかたがうまくなるようにと、わたしは夕日におねがいを言いたいと思います。(三年女)」

「例75・まっ赤な夕日。これで明日はきつといいことがあるぞ。夕日よ夕日、おしえておくれ。明日は何があるんだい。きつといいことにちがいない。夕日。明日に早くしておくれ。どうか明日も幸せになつてほしい。いつまでも幸せでありますように。(五年男)」

前にも述べたが、今回の調査では、作文を書く際に、夕日をおがむようなことはさせなかった。ただ単に「夕日」という題を与え、心の中に浮んだ思いを自由に書かせただけである。それなのに、このような例が得られたのは、子どものイメージ運動の中に、祈るという働きがあるからなのであろう。子どもにとって祈りは、外から与えられたものではなく、子どもみずからのイメージ運動の中にある働きののだということが確かめられた。

イメージの祈禱性を実証する例の中には、こんなユーモラスなものもあった。

「例76・きょう、夕日を見ました。夕日につて、夕日にあなをあげました。そのあなに入るとはだかになってもあつてしょうがないんです。あなから出たらやまだくとまつもとさんがキッスをしてけっこんしていました。ぼくはあついののにへいきですごいなあと思いました。やまだくとまつもとさんは赤と青の線でむすばれていました。(二年男)」

これを結婚の原点と言うのは言いすぎかもしれないが、二年生の男の子の結婚のイメージが夕日と重なっていたという点は見逃せない。

また、夕日に神の存在を感じるという例もあった。「例77・夕日というのは、一日の終りを告げるものです。しかし、ちがう、全くちがう方向からとらえると、一日の神になります。ちよつと空想話みたいだけれど、海を見ると夕日は海の神のように、一日の終りと共に海に消えます。山を見ると、夕日は山の神になり山へ消えます。そして空にいる時、地上全てをみおろしている神です。そして僕たちは、夕日にいつも一日をうったえ、また見せています。そのように考えると夕日は大きい存在といえると思います。(六年男)」

「例78・夕日は、人を美しい心にさせたり、人をヤル気をおこさせたりする神様の化身なんじゃないかなあと思います。これからは、夕日を見られる日は、なるべく夕日を見て、ヤル気がおきるようにしたいです。(五年女)」

これらは高学年のもので、祈りの実感をはつきりととらえるために神を登場させたのかもしれない。しかし次の例を見ると、神の存在を超えた始源的な人間のイメージ運動として祈りがあることを思わざるを得ない。神を信じる信じないにかかわらず、子どもが自分のイメージ運動に素直に従うことが祈りなのではないだろうか。

「例79・夕日を見ると、きれいとか美しいとか思うけど、ずーっと夕日を見ていると心が休まる感じがする。そして、また明日も頑張ろうと思うこともある。それに一日の失敗のことをお祈りしようと思う。いつも見ているところは思わないが、時々見るとこのように思える。夕日というのはとっても心が休まるものだと思います。(六年男)」

夕日作文にみる イメージ運動の学年発達

子どものイメージ運動を探っていくと、そこには「邂逅性」「予見性」「没我性」「祈禱性」といった働きのあることが、これまでの考察で確かめられた。ここでは、その働きがどのように発達しているのか、すなわちイメージ運動の学年発達について考えてみたい。

「例80・でもちっちゃいころのゆめは夕日をつかまえて、夕日をさわりたいとおもっていた。でも夕日はざんねんながらさわれない。3さいのとき虫とりあみで

おつきさまをすくおうとした。6才になって夕日をおぼえてじぶんがバカとおもった。なぜかというとき虫のあみで夕日をおいかけたとか。もう6才になったら、夕日は見るだけとわかったから、もうやりません。夕日づかみは4才までやってた。でももう6才だからやりません。7才になってはじめて夕日がきれいなことがわかりました。ぼくのちかくのなかよしこうえんにいくと、夕日がきれいに見えました。なかよしこうえんから見た夕日は、すごく大きくて気に入ったので夕日を見るところはなかよしこうえんにしています。なんで夕日はきれいなのかな。いまでもゆめの中で夕日が大きな大きなプリンに見えます。(二年女)」

この例では二年生の女の子が今日に至るまでの発達過程を、夕日とのかかわりを通して自分なりにふりかえっている。

今までに紹介した80の例を読みかえしても、学年によってイメージ運動に違いがあることは明らかである。イメージの没我性でいえば、夕日にみとれたり、夕日にとびこんでしまふといった例は、三年生で最も多く、六年生には見られないこと。また、イメージの邂逅性でいえば、夕日を見て心がなごみおだやかになるといった例は、五・六年生になって多くなること。など、夕日作文チェックポイント集計表(表2)を見ていると、学年発達をとらえる手懸りが次々と浮び上がってくる。今回はその中から特に三つの視点を取り上げて考察したいと思う。

1、夕日と語り合う

三年生の作文には、イメージの没我性を数多く見出すことができた。没我性とは「我を忘れ自分のイメージの中にひたりきる。」といったイメージ運動の仮称

表2 夕日作文チェックポイント集計表

★数字は例の数 ()内は%

		祈 禱 性	没 我 性	予 見 性	選 返 性	
		神 待 性 見に行く 好き	出現 暗 明 没入	事件 戦争 予感	涙 浄 静 思い出 エネルギー	ポイント
		夕日は夕日が大好きです。 じろろは花園公園に夕日を見に行くのです。 ぼくはいつも夕日が来るのを待っている。 夕日というのは(中略)一日の神になります。	ぼくは夕日が大大大の大好きです。 じろろは花園公園に夕日を見に行くのです。 ぼくはいつも夕日が来るのを待っている。 夕日というのは(中略)一日の神になります。	「やった。夕日の中に入れた。」と感してしまっています。 夕日ってきれいだな。 さつきまで明るかった空が暗々となってしまう。 トマトが海から上がってくるみたい。	僕はなにかの前ふれだと思う。 夕日の中で戦いをさせます。 夕日と聞くと私はある前の事件を思いうかべます。	夕日を見てみると明日もがんばろうと思います。 夕日を見ると小さいときのことを思い出します。 夕日を見てみると(中略)心がやわらぎます。 夕日を見ているといやな事はわすれる。 わたしはどうしても悲しくなってしまう。
		0 0 3 4 (0) (0) (2.8) (3.7)	9 8 36 5 (8.4) (7.5) (33.6)(4.7)	0 0 0 (0) (0) (0)	0 1 1 11 1 (0) (0.9) (0.9) (10.3)(0.9)	二年
		0 3 8 19 (0) (2.2) (5.9) (14.1)	13 5 62 33 (9.6) (3.7) (45.9)(24.4)	0 2 1 (0) (1.5) (0.7)	1 19 5 29 6 (0.7) (14.1) (3.7) (21.5)(4.4)	三年
		3 0 6 25 (1.5) (0) (3.0) (12.6)	8 9 128 13 (4.0) (4.5) (64.3)(6.5)	0 1 0 (0) (0.5) (0)	1 19 8 25 7 (0.5) (9.5) (4.0) (12.6)(3.5)	四年
		1 0 15 18 (0.8) (0) (11.7)(14.1)	2 14 42 16 (1.6) (10.9) (32.8)(12.5)	0 1 0 (0) (0.8) (0)	1 5 20 48 6 (0.8) (3.9) (15.6) (37.5)(4.7)	五年
		2 1 0 19 (2.0) (1.0) (0) (19.4)	2 8 46 0 (2.0) (8.2) (46.9)(0)	2 1 0 (2.0) (1.0) (0)	4 15 23 29 7 (4.1) (15.3)(23.5) (30) (7.1)	六年
		6 4 32 85 (0.9) (0.6) (4.8) (12.7)	34 44 314 67 (5.1) (6.6) (47.1)(10.0)	2 5 1 (0.3) (0.7) (0.1)	7 59 57 142 27 (1.0) (8.8) (8.5) (21.3)(4.0)	計

であるが、具体的には「夕日に見とれる」「夕日の中にとびこむ」など、夕日との一体化を求める形で拾うことができた。そしてそれは、三年生で一つのピークをむかえるのだということも確かめられた。その三年生の中には、夕日を自分とむかいあう対象としてとらえようとする例も見られた。次に掲げるのがそれである。

「例81・ぼくは夕やけが好きだ。夕やけもぼくのことをすきだといいなあ。(三年男)」
「例82・夕日はきれいだ。赤い夕日があく手をしにきそうだ。(三年男)」
「例83・私ははじめて見た時の夕日は友だちみたいに思いました。(三年女)」

「例84・私は夕日と友だちになりたいといつも心の中心で思う。(三年女)」

「例85・夕日はぼくの友だちとも言えるでしょう。大きくかやく夕日に向かって「おーい、夕日」と言いたい。(三年男)」

夕日が好きだという例は二年生でも見られたが、友だちになりたいという例は、三年生以上にしか見られなかった。夕日を生きた対象として心を通い合わせたという願いは、「握手をしたい」「友だちになりたい」「呼びかけたい」といった形で表われているが、この呼びかけたいという願いはさらに発展する。

「例86・夕やけは、いつも私を見ている。私が見ていると、ついてきて、まっかな顔で私を見えています。山の方からみると動いていないようでした。山の野原でもきれいに夕日をみつけます。夕やけが後にいると、まっかな声をかけているような感じがします。私も声をかけます。(三年女)」

夕日から呼びかけられているような感じがするから自分も答えるというのである。声のかけ合いはおしゃべりにも発展する。

「例87・夕日がしゃべれるといいと思う。しゃべれたらいつも質問したいと思う。神様お願いします。夕日がしゃべれるようにしてください。わたしはいつまでもいつまでも待ちます。大人になっても待ちます。けして死んでも待ちます。神様いつかわたしの願いをかなえてください。お願いします。いつかそれを待ちます。夕焼けさんも祈っててください。(三年女)」

四年生になると声と声を響きあわせるおしゃべりの他に、心の中のおしゃべりができることも気付き始める。例88の方ではおしゃべりをあきらめてしまっているが、例89の方は心のおしゃべりに活路を見い出して

いる。

「でも、そんなのつまらない。」と言っているところが本根で、本根は例88も例89も同じということなのだろう。

「例88・私は、時々、思います。(夕日に目と口と耳があつて、お話が出来たらいいのになあ。)」でも夕日は、生きていない。あついあついてもあつい火のかたまり。とつてもきれいな夕日とお話出来たらいいけど、本当には出来ないことだから、考えてもすぐあきらめる。(四年女)」

「例89・夕日に、目や口があつたらいいのになー。そうすれば私と夕日でしゃべられるのにー。でも心の中でしゃべればいいのかな。声を出さないで。でも、そんなのつまらない。だからやっぱり夕日に目と口があつた方がいいな。(四年女)」

それが五年生になると、声と声を響き合わせるおしやべりを乗り越え、いきなり心の交流を求めている。

「例90・「夕日は悲しんでいるの。」夕日が見れない日は、話しかけてしまう。だが夕日は答えてくれない。この世の中の人々は、夕日をどう思っているのかな。私は友だちみたいに思う。ふしぎな夕日。ともだちみたいな夕日(五年女)」

「例91・だけど夕日はわたしのそうだん相手になりそう。夕日はちゃんとやくそくをまもっているからだ。だからわたしは夕日と話したい。(五年女)」

夕日は、おしやべり友だちから相談相手にまで発展することが出来るのだということなのである。そして次に掲げる例には、その相談の実態が詳しく書かれている。

「例92・夕日を見ると、わたしは悲しくなる。ふと前の小学校を思い出してしまふ。どうしてだろうか？」

私も考えてしまふ。やさしいやさしい友だった心。それが夕日のようだ。まっ赤にそまって静かな夕日。いや、やさしい夕日。時々、夕日がうらやましく思う。それはいつでも別れる日がないからだ。今ごろどうしているのだろうか。あんなに楽しかった日。うれしかった日。くやしかった日。それを思いだすと、よいい悲しくなる。夕日は、私の友だと思ふ。友というのはなんだろう？ どこにでもいるやさしい心。帰つてみたい日もあつたりする。私は自信をつけようかとも、夕日を見ると思う。私は友に何もできない。それを私が答えをやさしい心をさがすのです。私はけつして一人

ぼっちじゃないと、夕日をみて思うのです。(五年女)」子どもにとつての相談というのは、決して客観的な示唆を求めているのではないということがよくわかる。イメージ運動に身をまかせることによって、自分の中からわき上がるエネルギーを実感することが、子どもの求めている相談なのだろう。だからこそ、夕日が相談相手になれるのである。

「例93・何か悲しい事がある時は、心の中で夕日と話をしようなかんじで夕日を見る事もあります。(六年女)」

「例94・その夕日は人のように心をもっています。たまには僕達のように悲しいこともわかるでしょう。たまには僕達のようによこびもわかるでしょう。そんな夕日をしすませたくない。けれど夕日はそれが仕事なんだからしょうがない。夕日はぼくらの友達だ。ずっとずっと昔から長い長い年月を経て……。 (六年男)」

六年生になると、夕日を媒介としたイメージ運動の実感について、自信を持つて答えることもできるようになっている。

は、僕になにかさやいているようだ。笑いながら。僕は夕日のささやく言葉を心を落着け、一言一言かみしめて聞く。そうすると夕日は僕に一日の事を訪ねているようだ。例えば、一日有意義にすごした点とか、一日で一番印象に残ったのはどういう事か訪ねているようだった。なかなか答えられない僕は、間をあけて今日の理科の実験でよくわかり意義があつたと今日の国語でみんな元気よく発言して、意見を戦わせたのが一番の印象だったなどと答える。このように色々色々問答をしていると、夕日が僕を深い眠りにおとすような気がした。(6年男)」

こうやって子どもの作文を読み進んでくると、子どもの目がなぜあのように輝いているのかというところがわかってくる。ある子どもを強く叱つてしまつてから、自分を反省したり、その子どもへの影響をあやうんだり、一晚悩んでいても、次の日その子に会つと、案外ケロッとして晴れやかな顔をしていることがある。そんな時はほつと肩の荷が下りると同時に、子どものたくましさを感じするものである。夕日作文からそのたくましさの秘密を教えられたような気がする。

2、夕日は心の鏡

「例16・夕日を見ると、田舎のおばあさんや、おじいさん、いとこたちのことを思い出す。そして、そばにおじいさんとおばあさんが立っているようだ。夕やけの光は夕日の手だ。太陽は男らしい。夕やけも男らしい。月は美しい。夕やけは美しいオレンジ色にそまる。夕やけは東京の友達も思い出させてくれる。夕日は思い出させてくれるまほうのかみだ。(三年男)」

夕日を見ただけで、なぜ次から次へとイメージ運動が起つてくるのかは、子どもにも我々にもわからない。

ただイメージ運動が起こるといふ実感があることは子どもたちの作文が証明してくれている。この説明できない事実を例16では「まほうの鏡」にたとえているのだろう。この問いには六年生でも答えることができない。

「例2・夕日を見ると自分の一生と、過去が見えて来るように感じます。自分より何倍も大きく、明るく、優しく見える夕日は輝いています。そして素直さがあると感じます。そして自分の鏡だと思います。表現も見方によってはいろいろあります。夕日は自分の思っている事を出す機械だと思います。(六年男)」

六年生になると「まほうの鏡」ではなく、「自分の鏡」だと言っている点が興味深い。鏡そのものに心があるのではなく自分の心が映るのだという見方ができるようになっている。しかし「機械」と言っているところは、まだ鏡そのものに潜む力を全面的に否定している訳ではないようにも思える。そして、自分の心の変化を色にたとえている例もあった。

「例96・夕日は何色か。それがわたしにはわからない。赤い色？ そうじゃない。たぶんいろいろな人によって変わるのだ。わたしだつて夕日を見るとうれしい時はいろいろたのしい色に見える。かなしい時には、夕日の光りが、くもりのくらしい色になり、雨というかなしいそしてくらしい色になる。(四年女)」

四年生なので、まだ自分の鏡だという様に言い切ることはできないが、映すものの状態によって映し出されるものが変わることには気付いている。五年生になるとこのことを、映すものの感情で変わるのだというとなえ方ができるようになるが、それでもまだ「不思議」からは脱けられない。

「例97・夕日と聞くと私は楽しいというよりもさびし

いといった感じを思い出します。私はさびしいとひとこというとちよつとちがうようです。それはこういう事もあります。たとえばとても夕日が美しく見えるからです。私の夕日というのはかんじようでとてもかわるものだと思います。楽しい時はとても美しいものに見え、さびしい時はさびしく思えてきたりします。だから私は夕日とはとても不思議なものと思えます。(五年女)」

それが六年生になると、決して「不思議」だということに思いとどまつてはいない。自分なりのとらえ方を主張するようになってくる。

「例98・私は夕日が好きだ。しかし、好きな時と、嫌いな時がある。嫌いな時というのは、冷たい風がふき、空がうす暗く、ひとりさびしい時にながめる夕日だ。普通の人は、このムードが好きかもしれないが、私は、こいうムードは好めない。何故なら、私の好きなムードは温たい風がふき空が意外と明るく、みんなで口をあけて見るような明るいムードが好きだ。何故かという、やはりこの世の中は、一人さびしいより、みんなで明るくすごした方がおもしろいし、みんなで見つた方がたのしいからだ。だから、夕日を見る時も、パツと明るくして見た方が、私にとっては美しく見えるからだ。(六年男)」

「例99・夕日はきれいだ。だから僕は夕日が好きだ。なぜきれいなのだろうか考えたい。朝から太陽のほり昼になり、そして夕方になる。その時に夕日がでてくる。夕日は赤く輝くすばらしくとてもきれいだ。しかし自分が悲しい時に夕日を見ると悲しくなってくる。なぜだろう。夕日は太陽がしずむときに光るのだから悲しくなるのかもしれない。赤く輝いて、ほんとうに悲しそうに光る。でも、みんなが悲しく思うかも

しれないけれど僕にとってはなくさめてくれるような人のように感じる。とってもやさしい人だ。でも悲しい人には悲しく感じるであろう。ほくは夕日はとてもふしぎなものだと思う。うれしい時にも悲しい時にもどんな時にでも僕にとっては合うのだ。それだけ落ちついているのだと感じている。(六年男)」

どちらも「自分にとっては」と断つた上で自分なりの夕日とかかわり方について述べている。これらの例から、六年生になると、まほうの鏡のまほうを操るのは自分の感情だということに気づき、さらに自分の感情については自分なりのとらえ方ができるようになっているということがわかる。

3、夕日に抱かれる

「例100・わたしは悲しくて二かいへかけのぼつて、つくえで「ぼろん」となみだをこぼしました。そして心の中でさけんでいました。でもそのとても悲しい気持ちばかりありません。それでかみに心の中でいつていることをきたない字で書きました。でもまだその気持ちがおさまらないのでカーテンを開けて外をながめました。四・五さいの子が選んでいました。わたしは「楽しそうに遊んでいるな」と思っていました。空をみました。夕日がみえました。なんだかその夕日はあたしをなくさめてくれました。わたしは夕日がとってもすきです。(四年女)」

このように夕日を見ることによって心が静まりおだやかな気持ちになるという例はどの学年にも見られたが、その数は低学年より高学年に多かった。子どもは窮地に追い込まれた時でも、どん底につき落とされた時でも、自分の心の中に沸き上がるイメージ運動に身をまかせることによって、平静に帰り得ることを知っ

ていた。前に紹介した例41・例42はどちらも六年生のものだが、一つの事件を通して泣くということが、精神の浄化作用を起こすと同時に、平静に向かう複元運動にもなっているということについて、詳しく書かれている。過去の思い出を書いた例は他の学年にも見られたが、これらのように、事件に的が絞られているものはなかった。六年生になると、夕日を媒介にして過去の事件をふりかえり、その精神活動を見つめなおすことができるようになるということなのである。

これらの他に、平静への複元運動として、眠ることをとらえた例もあった。

「例101・夕日はなんかわたしをねむらせようとする。（思うのはわたしだけかもしれないけど）わたしは夕日が大好きです。なぜかという、もしもつかれていたら夕日でねむることができからです。（四年女）」

夕日作文に見られた泣きと眠りは、どちらも無意識の世界に入っている点で共通している。

「例102・そして30分ぐらいたったら、みんなかえってしまった。そうしたら夕日が見えた。そのとききれいだなーとか、大きなあとか、金星ぐらいに明るいなあと思った。そして公園にぼくしかいなくなったら、ぼくは、さびしいなあーと思ったが、そのとき夕日を見ると、なにかとつてもやさしいおかあさんのように、ぼくを見守っているように感じた。そして何かとつても明るくあつたかいようなものをかんじて、何かほえんでしまった。そしてつかれたし、夕日があつておかあさんのようにあつたかいので30分ぐらいてしまった。そして家についたら、ボタン、グーとねてしまった。そして今は、太陽は明るく大きく美しいだけでなく、お母さんのようにあたたかいぬくもりと、あたたかく見守っていてくれるように思っている。（五年

男）」

ここで、夕日にお母さんのぬくもりを感じている点に注目したい。そして前に紹介した例11と比べてみた。

「例11・ゆう日を見ると、わたしはかえるじかんなのでかえります。わたしが「ただいま」とゆうとおかあさんが「おかえり」といいます。それをきくたんび、わたしはうれしいです。あそびにまたいきたいと思えます。（二年女）」

表現の違いはあっても、夕日にお母さんのぬくもりを感じることが平静への複元運動となっている点は同じである。母胎によって精神を浄化させるといった作用は、高学年になったからといって変化するものではないのだろう。ここでは、発達をとらえる上で、だんだん変わっていくものの他に、変わらずに持ち続けられるものもあるという点をおさえておきたい。

おわりに

人間が泣くとはどういうことなのかというテーマに取り組んでから今日に至るまで、様々な試行錯誤を重ねてきた。研究会のたびにおまえは一体どんな泣き方ができるのかと、お互いに尋ね合ったりもした。研究会の席では本根で語り合っているのだし、自分を隠している意識もないはずだった。また今回のテーマの研究を進める過程で会員が今まで以上にそれぞれの性格、おいたちなど恥しい部分をさらけ出したことも確かである。それでも謎は解けなかった。大人がいくらこだわりを捨ててはだかになっているつもりでも、まだ何かにとらわれているのだろう。

そんな中で夕日作文は謎を解く鍵になってくれた。そして子どもたちが次々に心の扉を開いて、謎を解く

手懸りを与えてくれた。おかげで子どもの感情生活の一面を探ることができたわけである。夕日作文に書かれたイメージ運動の実感からは、大人には語ることでできなかった魂の声を聞くことができた。夕日作文を読みながら涙を流したこともたびたびである。いつもなら研究が進まない、自分のペースが遅いなどへのくやし涙なのだが、今回だけは違った。夕日作文に心を浄化されたのである。一つの例だけでは解けない謎も六六七つの例を整理していくうちに、例と例が共鳴し合い反発し合って、謎がだんだんに解けていった。事実、子どものイメージの情動における四つの仮説がここまではっきりした形で実証できるとは、原稿を書き始めた時も予想していなかった。そして原稿を書き終えた今、少しオーバーかもしれないが、子どもたちに未来を託す希望がふくらむ思いである。

我々が大人になるまでの間に失ってしまったもの、失わないまでも、無意識の底に押しこめてしまったもののの中には、人間の真理、生命の根源ともいえるものがあるのではないだろうか。そんなことを今あらためて感じている。静かに子どもとむかいあい、子どもにその本根を語ってもらうこと。その本根と共鳴し合って生きていくことを喜びとしながら、今後も研究が続けて行きたい。

（八王子市立第六小学校教諭）